

連載¹¹²

内海善雄の
(ITU元事務総局長)

やぶ睨み
「ネット社会」論

環境変化に切迫感のない「群れ」―日本

本を見ると、江戸から明治へと大変革をした日本社会という群れは、世界を相手に戦うまで突き進み、破綻したものの全く異なる国ではないかと思えるほど体制を変えて生き延び、繁栄した。いかに変革できるかということが、生き延びるために必須であることは、歴史を見ると明白である。

環境への対応を妨げる我欲

しかし、簡単ではない。国際社会では、真逆の行動原理が支配的である。それは、「持続可能な発展 (sustainable development)」という地球社会の最大課題に対する対処ぶりである。

もともと「持続可能な発展」とは、一九八七年、ブルントラント委員会 (国連の環境と開発に関する世界委員会) の報告書に出た理念で、地球環境破壊の進む中、将来のニーズにも応えられる範囲内で現在の開発を行うという考え方だったと思う。それが、その後、二〇〇〇年の「ミレニアムサミット」では、ありとあらゆる開発願望が取り入れられ、国際社会の網羅的な開発目標 (MDGs ミレニアムゴール) にまとめ上げられた。種々雑多

「目には青葉 山ほととぎす 初鱈」とは、よく言ったもので、この季節になると生命力にあふれた生き物に自然と関心が向かう。

世代交代で種を維持する生物

生き物は皆、世代の交代を行うことによって種を保存する。一個の個体の寿命は限られ、命は新しい個体に引き継がれる。たとえ挿し木のようなクローンという形をとっても、世代交代が種の維持のための自然の摂理となっている。人も同じ生き物だ。

このようにして世代交代という方法で維持された個体が、群れて集団を形成して生きていくが、環境の変化に適切に対応して発展する群れもあれば、対応しきれずに衰退して消滅してしまうものもある。

人間社会も全く同じではないか。近年の日

な開発目標が、「持続可能な発展」という言葉で括られ、お墨付きを得たものになった。

さらに、二〇一五年には、「国連持続可能な開発サミット」が開催され、「我々の世界を変革する…持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。SDGsと呼ばれる、現在の国際社会の共通目標になっている。しかし、内容的には、MDGsをそっくり継承するもので、種々雑多な開発目標が羅列され、その実現があたりも持続可能な発展だとされている。

筆者はこの間、二〇〇三年と二〇〇五年に「世界情報社会サミット」と呼ばれる情報通信部門から世界を俯瞰した国連サミットを開催し、その事務局長の任に当たった。宣言文の起案にも密接に関与した。ここでは、各国政府や産業界、NGOがあらゆる要求を宣言文に盛り込むべく働きかけ、要求の曼陀羅図になる様を見せつけられた。それは、全体が生き延びるために必要な大きな変革や世代の交代、すなわち「持続可能」にする条件などは忘れられ、現状を前提にした個 (各国、利益団体等) が我欲を実現しようとするあさましいプロセスであった。

日本の存続の危機だと認識はしているが……



日本を取り巻く環境変化

翻って、現代の日本はどうだろうか？ 今、日本という群れが直面している大きな環境変化は次の三つであると思う。

第一に、技術、特に情報通信技術の発展により、生産活動の仕組みが大変革していることである。従事する者に求められる能力も様変わりした。しかし、変化に応じた制度や教育体制がつくられてはおらず、他の群れ（外国）との競争力が激減している。

第二に、国際環境の大変化である。日本をしのぐ産業力や、米国の何倍もの大きさの市場が隣国に出現した。他の群れとの交易関係や友好関係を百八十度変化させなければ、群

れの存続が危ぶまれていることは明白である。第三に、群れの構成要素の大変化である。

若者が減り、高齢者がかりになった群れが、やがて急速に萎んでいくことは明らかだ。若い群れであった昔と同じ体制や行動をとることとはもはや不可能だが、この内部変化に対応できていないばかりか、群れの再生を図る手立てが全く打たれていない。

このような大きな環境変化は、誰もが認識していることであり、また、誰もがこの変化に対応できなければ日本という群れの存続が危うくなると考えている。

しかし、令和天皇が即位され、十連休の中、世の中はお祝いムード一色、まことに天下泰平の体であった。その間、テレビは休日の番組編成で、普段BS1で中継される世界の放送局のニュースは一切放送されず、代わりに皇室番組やスポーツ番組が延々と放映される。世界は激動しているにもかかわらず、あなたも日本一国しか世の中に存在せず、永遠に存在し続けると思っているようである。群れの立ち位置を見ず、己の安寧と繁栄のみ望む図式は、残念ながら、地球環境の存続が危ぶまれているのに各国がエゴを主張する状況とまったく同様であるように思える。

定石のない変革への道

さて、どうやって日本という群れは変革を起こしてきたのか？

江戸幕藩体制の確立は、長い戦国時代の混乱のプロセスを経て築き上げた体制である。いわば群れの内部崩壊から立ち直る自動制御プロセスだったと思う。

明治維新は、黒船の到来を契機として下級武士が起こした革命である。知識教養があったが社会の矛盾をともに受けた下級武士たちのエネルギーが、国際情勢の変化を槌として日本を変えた。

戦後の体制は、占領軍によって無理矢理につくられたものだが、東西冷戦の世界情勢や大量消費社会の到来にマッチし、期せずして大成功した。

このように日本の歴史を振り返ると、環境変化に対する対処ぶりに定石は見当たらない。はたして日本は、一体どのようにして大環境変化に対応するのだろうか。切迫感のない中で、最大静止摩擦を超えるエネルギーがどこから得られるのか、なかなか見極め難い。だが、皆が無責任に放置していると、恐竜のように環境変化に適応できず滅びていくのが歴史の教えではないだろうか



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。郵政省入省。電気通信政策信託の自由化など、国際局長企業や事務総局長企業など、各種団体の役員、大学教授などを歴任。IEEE名誉会員。